



だ^ッ 上 請
つ
み

第二部



岩 波 書 店

わだつみ 第二部

一九七七年二月一六日 第一刷発行 ©

定価二〇〇〇円

著 者 井 上 靖

発行者 岩 波 雄 二 郎

発行所 株式会社 岩 波 書 店

〒101 東京都千代田区一ツ橋一五
電話 〇三二六五二四二
振替東京六二六四〇

印刷・精興社 製本・松本製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

第二部

一章

——明治四一年（一九〇八年）二月二七日 加賀丸にて 桑一郎——

伯父上様、伯母上様

横浜を出帆した日とその翌日は波も静かで快適な船旅の楽しさを味わいましたが、三日目から本格的に太平洋のまっただ中へ乗り出したためか、船は大きな波に揉まれるようになりました。同じ波と言っても沼津で見る駿河湾の波とは全く違ったものです。沖合に眼を当てると、海面が大きく盛り上がって来るのが見え、それがたっぷり時間をかけて、こちらに近寄って来ます。波というようなものではなくて、大きい潮の盛り上がりです。汽船はその潮の山の上に乗って行き、そしてまたその谷へ降って行きます。そうした波が次から次へ押し寄せて来ます。その度に水平線が高くなったり低くなったりします。船室にはいつていると、小さいまるい窓からその水平線の上がったり下がったりするのが見えます。それだけ船が揺れているわけで、その窓に眼を当てていると、船に弱い人はみな酔ってしまいます。

幸いに私は船には強いようです。船らしい船に乗ったのは勿論こんどが初めてですが、いつもの船酔いの心配はありません。三度の食事とお茶の時間が待遠しいくらいですから、もうア

メリカまで船酔いの苦しみは知らずに過せると思います。今日は横浜を出てから五日目です。

私の乗っている加賀丸は七〇〇〇トンの船で、郵船の中では一、二の優秀な船だそうです。私は相原のおば様の勧めで二等に乗っていますが、二等船客は極く僅かで全部で六人です。大学教授が一人、学生が三人、銀行員が一人、それに私です。みな親しくなっています。船長、事務長、機関長等の高級船員と同じ食堂で食事をしますので、そうした人たちの話を聞くだけでもたいへんな勉強になります。

銀行員は篠田さんと言って四十歳ぐらい、サンフランシスコの銀行に赴任する人で、非常に親切で私のことは何から何まで世話をやいてくれます。サンフランシスコまで一緒ですから、シアトルに着いてもこの人と行動を共にしていればいいわけで、その点たいへん心強いです。

三度三度の食事は勿論洋食のフル・コース(定食)で、たいへんなご馳走です。食事の作法は東京に居る時アメリカ人の牧師の家に英語を習いに通っていたことが大いに役立っています。

三等の船客は多勢です。二百人以上だと思います。いろいろな人が居るようですが、何しろ三等の方は出歩ける甲板にも制限があって、こちらがわざわざ蚕棚のような三等船室にまで降りて行かない限りは、時たま遠くから顔を合わせるぐらいで、三等船客とは話を交す機会は殆どありません。二等船客はシアトルに上陸すると、そこから汽車でサンフランシスコに向うことになっ

ていますが、三等客の方はシアトルで他の沿岸船に移され、その船で何日もかかって南下し、加州のどこかで移民官の取調べを受けて、その上で上陸するのだそうです。この移民官の取調べも私たちの方はシアトルで極く簡単に済むらしいですが、三等客の方はなかなか嚴重だと聞いております。二等と三等とはたいへんな違いで、その点二等を勧めてくれた相原のおば様に感謝せざるを得ません。今日はこれでペンをおきます。

——三月二日——

伯父上様、伯母上様

その後ずっと平穩無事な航海が続いております。尤も三日ほど前に、船が呑み込まれてしまうのではないかと思う程の高波に、終日襲われました。何回かマントに身を包んで波を見るために甲板に出ましたが、さすがに私もあまりいい気持はしませんでした。しかし、そうした高波は十一月から三月頃までの、詰まり冬の北方航路では普通のことだそうです。

今日、事務長からいろいろな話を聞きました。現在アメリカの西海岸には日本移民の入国に反対する一部の勢力があるそうです。一部と言ってもかなりの数で、時折日本移民入国反対を唱えて騒いで居るということです。従ってアメリカ政府でも表向きはともかく、日本移民の入国には

慎重な態度をとらざるを得なくなっているようです。こうした空気を知って、これ以上情勢が悪化しないように、日本の政府も新しい移民の渡航を自分の方から極力押えている現状で、私が非移民の旅券を貰ったのもそのためだそうです。めったに非移民の旅券も出さないそうですが、私の場合は相原のおば様が内務大臣の平田さんに頼んで下さったので、そのために特別の措置がとられたのだと思います。商用のための渡航ということになっていて、一般の移民の旅券とは色が異っており、非移民と印刷されています。

しかし、アメリカの労働省では既に入国している者に対しては寛大で、そうした人たちが日本に帰って、再びアメリカに向う場合、殆ど問題なしに再入国の許可を与えられているそうです。この船に乗っている三等客は全部そうした再渡航者で、その何分の一かはお嫁さんを探しに一時的に帰国した人たちらしいです。お嫁さんにありついた人も居れば、ありつけなかった人も居るようです。しかし、事務長さんの話では、お嫁さんにありついた人は案外少ないのではないかといいことでした。と言うのは、お嫁さんにありついた人はそのお嫁さんと一緒にこの船に乗っているのが普通ですが、そうした女の人の数は極く少ないということでした。お茶の時間が来ましたので、今日はこれまでにして、これから食堂へ行きます。

——三月四日——

伯父上様、伯母上様

船は二、三日前からアメリカの海岸に近い海域を北上しています。直ぐそこにアメリカの海岸が見える程陸地に近いところを航海することもあるそうですが、今朝まではそれらしい陸地は見えませんでした。ところが今日、午後になってからオレゴン州からワシントン州にかけての陸地が見えて来ました。同じ二等に乗っている北池という学生が、陸地が見えることを船室まで教えるに来てくれました。甲板に飛び出してみますと、なるほど陸地が見えています。普通の陸地ではありません。何十万本か何百万本か判らぬオレゴン・パイン(松の木の種類)が行儀よく並んで、それが一様にまっ白く雪で覆われています。思わずはっと息をのむような風景で、偉大とも荘厳とも形容のしようがありません。

一 章
これだけは伯父様にも伯母様にも見せて上げたいと思いました。伊豆にも年に一回や二回は、野山を真白にしてしまう降雪がありますが、同じ雪景色であっても、それは全く違ったものです。降り積った雪が凍っているのでしょうか、何となく固そうな感じで、どことなくその白さには艶があります。私が小さい時使っていた珞珈びきの洗面器の白さとも言いう以外仕方ありませんが、あの洗面器の白さにもっと磨きをかけて、一層艶のあるものにしたようなものです。そうした白

さが初めて眼にしたアメリカ西海岸の雪の白さです。

それからオレゴン・パインの林ですが、これはたいへんな数のものが、きちんと整列したように並んでいます。天城の杉も植林したところは整然とした感じがありますが、あんなものではありません。どこまでも尽きることなく、行けども行けどもその整然たる林が続いております。

——三月十一日 ポートランドにて 桑一郎——

伯父上様、伯母上様

今日オレゴン州のポートランドに着きました。大分御報告することが溜っていますので、船に乗っていた時から順を追って認めることにいたします。

船はオレゴン州の陸地に沿って北上し、ポート・タウンセンドに碇泊して一夜を明かし、翌日シアトルに上陸しました。シアトルに上陸したのは三月九日で、その晩そこに一泊し、それから汽車に乗って、今日ポートランドに着いたわけです。シアトルに上陸してから三日目です。あすは汽車で最後のコースとしてサンフランシスコに向います。いま、ここから手紙を出せるということです。大急ぎで机に対かったところです。走り書きになって読みにくいと思いますが、御判読下さい。

上陸してから非常な寒さが続いています。シアトル入港の前夜ポート・タウンセンドで一夜を明かしましたが、氷結を防ぐために船は一晚中エンジンを動かし続けていました。寒いのは海ばかりかと思っていましたが、シアトルに上陸してみると、ここはここで何年にもない大雪でした。街も山も一面に深い雪を被っているのです、どのような町かは判りませんが、雪がないとシアトルの町は三方山に囲まれ、坂の多い非常に美しい町だそうです。私たちの泊ったグレート・ノオザン・ホテルも坂の中腹にありました。普通日本人の間ではこんな呼び方はしないで、日本流に大北旅館と呼んでいるそうです。勿論ここは日本人経営のホテルです。

シアトルでは雪のために外出はできず、終日応接室になっている大広間で過しました。この広間には真中に大きな囲炉裏が切ってあって、朝から晩まで材木の切れはしを燃しづめに燃していました。そしてその囲炉裏の周辺にはあちこちに沢山の椅子が置かれてあって、客たちは勝手にその椅子を好きな場所に動かして火にあたったり、二、三人が固まって話をしたりしていました。その部屋に居る限り戸外の寒さは感じられませんでした。加賀丸の二等船客六人もみなこのホテルに泊りました。私たち以外も日本人ばかりで、これからどこかに働きに行く人や、いままで働いていた地方から引揚げて来た人や、そうした人たちが集っています。シアトルという町はそういう人たちの中継地になっているのだそうです。

開炉裏の周囲で、そういう人たちが話し合っている話を聞いていて、アメリカという国には面白いこともあれば、日本では考えられぬような怖ろしいこともあると思いました。

シアトル一泊後、汽車に乗って南下しました。シアトルの駅では日本人が多勢赤帽になって働いていました。荷物を汽車に運んで貰うのが、同じ日本人として悪いような気がしました。汽車に乗るとアメリカ人ばかりで、汽車に乗ってから初めてここは日本ではないのだという思いを深くしました。前に船から見たオレゴン州からワシントン州にかけてのオレゴン・パインの林の雪をかぶった美しさについて書きましたが、その美しい林をこんどは車窓からいやという程眺めました。

東京で相原のおじ様からポートランド領事館に領事の貫井さんという人を訪ねて行くようにと紹介状を貰ってありましたので、銀行員の篠田さんに相談しましたところ、一緒に下車して同行してやってもいいということでしたので、篠田さんの好意に甘えることになりました。尤も篠田さんは篠田さんで、貫井領事に会えるなら自分も会っておきたいという意向を持っているようでした。

ポートランドの町も雪で真白でした。雪は降ってはいませんでした、何日か前に降った雪がそのまま凍り付いています。この町の雪も、やはり瑛瑯質のような固さと光沢を持った雪です。

ボートランドに降りた時、これは大変な寒いところへ来たという感を深くしました。町中が凍り付いているのではないかと思いました。実際に町中が凍り付いていると言つてよく、どこの家でもこの何日か水道が凍つて一滴の水も出ないということでした。

しかし、そうした寒さの中で、青い眼や茶色の眼をした子供たちは、町の到るところでスケートをやっていました。何とも言えず楽しそうです。寒いところは寒いところで、やはり楽しい遊びはあるものだと思います。

領事の官邸に行きましたが、領事はたいへんいい人で、勧められるまま、私たちはそこに一泊させて貰うことになりました。いまこの手紙は領事邸の二階の一室で書いております。夕食を御馳走になつて、そこを引き上げたのが八時頃でしたので、いまはもう十時を廻っている時刻だと思います。

明日、この手紙を、船の中で書いたものと一緒にして領事館に託します。

——三月一日 サンフランシスコにて 桑一郎——

伯父上様、伯母上様

その後お変わりなくお過しのことと存じます。三月十三日に無事に目的地サンフランシスコに着

き、翌日から東地商会にその一員として勤めております。東地さんの下に、私を入れて五人の店員が働いております。みな親切ないい人ばかりで、この分なら心配した程のこともなく気持ちよく働いて行けそうです。

まだサンフランシスコに着いて今日が六日目です。社長の東地さんにはサンフランシスコに着いた晩、町の料亭で日本食を御馳走になりましたが、それ以来ずっと東地さんは忙しいらしく、店を留守にして飛び歩いていることが多く、殆どまだ話らしい話はしていません。東地さんはいずれ落ち着いたら父と母のところにも連れて行ってやると言ってくれていますので、そのうちに父や母の近況をお報せすることができると思います。

私の方も店の仕事を覚えたり、初めての外国生活に慣れたりすることで忙しく日を送っています。落着くまでにはなお半月や一月の日子は要すると思います。それまでの間は仕事の見習で毎日を送ります。仕事と言っても別段難しいことはありません。荷物に縄を掛けたり、反対に荷物の縄をほどいたり、そんな誰でもできるような仕事です。店にはまだ出ません。客の殆どがアメリカ人ですので、英語が話せるようになるまでは、店に出ても何の役にも立たないのです。英語は東京で習った筈ですが、実際に客の相手をするとなると、何一つ口から出ず、たとえ口から出ても、なかなかこちらの言うことは先方に伝わりません。